



TITLE:

わかみよにふるなかめせしみに

AUTHOR(S):

勝木, 渥

---

CITATION:

勝木, 渥. わかみよにふるなかめせしみに. 物性研究 1981, 35(5): 303-306

ISSUE DATE:

1981-02-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/90181>

RIGHT:

ぼくは物小委の会議にはほとんど休まず出席していて、新しい研究計画の話はきき、自分なりのイメージは抱いてきたつもりだった。しかし、会議の席上での限られた時間での説明からぼくが自分なりにえがいていたイメージは、ぼくの今いる地方大学の現状から自由であることはできなかったようである。ヘリウムはおろか窒素の液化機さえもたぬわれわれの所では、多くの研究室の隣に居をかまえる実験の連中は、液体窒素を買うと、それが空中に霧散してしまう前にできるだけ多くの測定をと、徹夜で実験し（このレポートを書くために念のため確かめたら、昔はよく徹夜でやったが、今ごろはそうまではやらないとのことだった）、ヘリウム温度での測定には物性研まででかけて共同利用施設を利用する。いつも見ているそのような状況と、ぼくが大学を卒業するかしないかの頃、東北大金研に入ったヘリウム液化機のことをすばらしいニュースとして研究室の話題になっていたという原記憶が結びついて、ぼくの心は30年前さながらに、ヘリウム温度を世にも稀なる貴いものとして思いえがいていた。頭では今やヘリウム温度は世にありふれた何の変哲もない当り前の温度になっているのだと考えつつも、頭と心は別物であった。

短期研究会の3日間は、このようなぼくの心象の崩れ去る3日間でもあった。

まず驚いたのは計画の壮さである。そこに投入される金額はその壮さの1つの指標であるだろう。物性研がそれぞれ数億ないし10億の規模の計画3つ（超低温、超強磁場、極限レーザー）、東北大が億の規模の超低温と、10億の規模（総要求額30億）の超強磁場、名大の超低温が（メモしそこなったが恐らく）億の規模、等々。これらの壮大な計画について、時間をかなりたっぷりとして細かい所まで詳しく説明がなされたので、短時間での概括的・概念的説明とはちがって、細部のアクチュアリティを通じて全体の壮さがびしびしとぼくの心にひびいてきた。その一方で、何か別世界の出来事であるかのような気がしないでもなかった。百万円たらずの赤字をかかえて、今年は単行本を買うのを全面的にストップするか、来年は雑誌をへらすか、などと頭を悩ますのが、ぼくにとっての現実世界なのだから。

地方大学所属のメンバーが物小委に出るようになったのは第8期から（1969年以降）だった。ぼくは地方大学が研究基地として機能できるような物質的条件をととのえることの必要性を強調し、重点主義に反対して経常研究費の充実を主張してきた。それは場違いな場での主張としばしば見なされた。ぼく(5)が「一部からはラジカリスト集団と見られた事もあった」

(伊達) ほどに物小委で重点主義反対を時には声高く(最近は沈黙がちに) 唱えつづけてきた一方で、そこからは全く声のとどかない各大学からの概算要求を通しての形で、重点主義はかくも見事に物性物理の分野でも貫徹してしまったのか、という思いもおさえることができなかった。このような状況の中で、地方大学は、物性物理の分野でどのような面で意味ある仕事をするのできるのだろうか、近代的工場ができて町工場がさびれてつぶれてゆく、そんな連想が浮かびもした。亀がよよちよちと歩んで、ようやくかつてアキレスがいた辺りの地点に辿りついたときアキレスははるかに遠く霞のかなたにいて、亀は永久にアキレスに追いつけないこれまでの物とは桁ちがいの物がつくられてゆく、その中にある物理の話は物理の話としてそれなりの面白さをもってききながらも、亀の脳裡をよぎるのはこういう思いであった。

2日目の夜、地方大学からの参加者が集って会食した。その時集った者から口々に出た意見は、枯渇・飢餓というような言葉で形容するのがふさわしいような経常的研究費の苦しさであった。大口の科研費をねらうか、直接的・間接的に経常的研究費の増大につながるような大学の機構の変化を求めるか、ということにしか研究継続の経済的裏付けを得る道はなさそうだという意見が支配的であった。研究会で報告された壮大な計画と地方大学における物性研究がどのように結びつくか、ないし結びつけるか、という点について具体的なイメージを抱くには到っていなかった。イメージを抱くには余りにもかけはなれていた。むしろ、重点主義の強化にともなってこれまでのような平凡な共同利用ができにくくなる可能性があるのではないかという点に強い危惧の念が表明された。この席で出された意見の一部は研究会の席上でも述べられたけれども、共同利用がしにくくなるのではないかと危惧の念はかなり深い。

このような危惧の念が、地方大学にいる者の“ひがみ”に起因する杞憂であることを切に望むけれども、研究会の席上気になる発言がないでもなかった。「レーザーは素人には扱いにくい面があり、そのために共同利用には向かない面がある」旨の説明が、「だから共同利用できなくても仕方がないんだ」とのニュアンスをもって(とぼくには思えた)、レーザー研究者からなされた点である。たしかにレーザー関係者の話をきいていると、共同利用になじみにくい面を装置自体がもっているらしいことは見当がつく。「だから共同利用がどのようにすればうまく行くか、衆知をあつめたい」という方向で考えてほしいと思った。そのことを指摘する発言をぼくは研究会の席上でした。それに対して物性研所長からは「新しい共同利用のあり方を考えてゆかねばならぬと思っている」との発言があった。

超低温・超強磁場の話をきいていて、ひとつ気になったことがある。物性研でも名大でも東北大金研でも、断熱消磁用あるいは高磁場発生用の超伝導磁石が計画通りないしは仕様書通り動かないので、当分は計画を下まわったままでゆくとか、作りなおしをさせている(2台目も

落第で、今3台目をやらせている)とかの報告があった。東大理学部でも超伝導磁石を発注したが、注文をうけた会社は high field with zero(断熱消磁をやる場所での磁場は強く、測定場所でのそれはごくごく弱く)の注文が日本から殺到していると語ったそうである。超伝導磁石製作会社の技術の限界が、日本の超低温計画の達成温度を左右する?

第3日におこなわれた物性試料作成の部の報告と討論は、第1日、第2日の“巨大物性物理学”とはちがった問題点を示していて、また別の面白さがあった。後者が主として、装置と技術(と物理)が問題であったのに対し、前者では、物理・化学の問題もさることながら、むしろ研究者間の協同関係、作る人と測る人との人間関係、その辺のところに最大の問題がありそうなことが示唆されているようにぼくには思えた。これとは一応別の問題ではあるが、多少似た面をもつ問題として研究者と技官との問題がある。共同利用施設がその施設の保持・恒常的整備にたずさわる技官がほとんどいないという状況のもとで必ずしも研究者にとって常に快的に使える状況にはないという事がある。欧米と比べる時そのことは日本できわめて顕著である。しかし、ただ欧米と比較してぐちをこぼしてもはじまらない。多分、日本における初等・中等・高等教育全般にわたっての自然科学教育・技術教育のありようを考えなおすことから始める必要があるだろう。

この3日間の短期研究会はぼくにとってきわめて衝撃的なものであった。そしてぼくがここから感じたものは、おそらく、この将来計画を積極的におしすすめようとしている人々の感じとは、かなりちがったものであるだろう。

計画の壮大なともいうべき巨大さに圧倒されながらぼくが感じていたことは、地方大学にいるぼくのような研究者は、意識的にこのような方向とは別のところに自分の研究分野を設定する方がユニークな研究ができるのではないか、ということだった。いわば直線的に、まっしぐらに先端へ先端へと進んできてこのような将来計画にまで到った、それはあり得た物理の発展の道々の中の1つがたまたま現にあるに到ったもの。あり得ていまだあらわれていないもっと別の道があるのではないか、地方大学が重点主義からおきざりにされるとすれば、その条件を逆手にとって、あり得た別の道をさぐるチャンスとすべきではなからうかということだった。

そういう事を感じるぼくを批判的に見るもう1人のぼくが同時にぼくの中にはいた、そのような考えは、要するに敗北主義が自己肯定的表現の衣をまとったものに過ぎない、問題の阿Q的解決に過ぎない、大大学中心的状況への批判を事実上放棄して、重点主義との共存を求めるに過ぎない、と。

いささか支離滅裂の感想になったが、地方大学にいる1人の人間としての感想を正直にかいてみた。

ぼくは今年で4期12年間物小委の委員をつとめたことになる。その12年間を通じての、

勝木 渥

そして、この物性研の短期研究会に参加しての感想を14文字に託すれば

年年歳歳人相似，歳歳年年花不同。